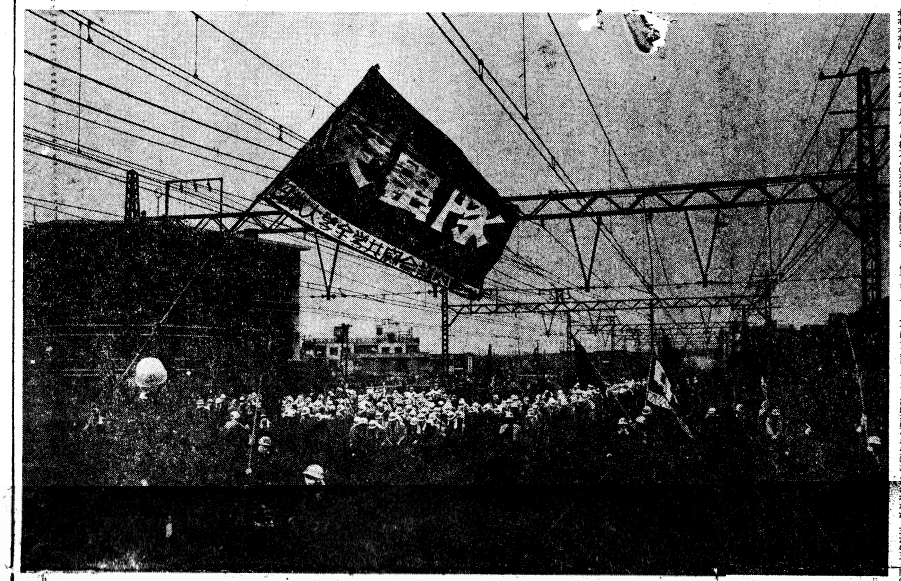
18時間の戦闘を貫徹

佐藤訪米に空前の大反撃



一カ月の激闘の成果ふまえ 確固として激動の七〇年へ

沖縄、三里塚を両軸に

十月下旬以降、闘いの七日間と時を同じくして、東京都心一帯を血に染めあげ、ついに十時間にわたる激闘が展開された。「われわれは一二・一から始まる」との合言葉どおり、全国の同志諸君は、この闘いの意義を的確に把握し、闘いの成果を総括し、さらに闘いを発展させるために、ただちに闘いの教訓を学びとり、闘いの成果をふまえて、闘いの新たな発展のために、全力をあげて闘いぬいたのである。佐藤訪米阻止闘争は、最後まで多くの人民の支持と支援とを受けて、ついに十時間にわたる激闘を闘いぬいたのである。

われわれは、この闘いの意義を、十・二闘争以降の闘いの発展の中に位置づけ、闘いの教訓を学びとり、闘いの成果をふまえて、闘いの新たな発展のために、全力をあげて闘いぬいたのである。佐藤訪米阻止闘争は、最後まで多くの人民の支持と支援とを受けて、ついに十時間にわたる激闘を闘いぬいたのである。

二年間の全てを賭けた闘い

われわれは、一九六七年十月八日、第一次羽田闘争を闘いとって以来、二年間の全てを賭けて闘いぬいてきた。それは、学生運動の一部の突出した闘いとしてではなく、労働者階級人民の闘いとして闘いぬいてきた。

日米第二安保の闘いのすべてを、一九七〇年安保闘争の最大の決戦場である三里塚闘争を軸に、それと結合する形で闘いぬいてきた。十・八羽田闘争、十・二一国際反戦デー闘争、十一・一六渋谷闘争、十一・一四佐藤訪米阻止闘争、十一・一七沖縄闘争、十一・二二労働者集会、十二・四三里塚闘争、十二・一四全国労働者総決起集会、十二・一八三里塚闘争、十二・二〇全国学生総決起集会、十二・二四全国労働者総決起集会、十二・二五三里塚闘争、十二・二六全国学生総決起集会、十二・二七全国労働者総決起集会、十二・二八三里塚闘争、十二・二九全国学生総決起集会、十二・三〇全国労働者総決起集会、十二・三一三里塚闘争、一・一全国学生総決起集会、一・二全国労働者総決起集会、一・三三里塚闘争、一・四全国学生総決起集会、一・五全国労働者総決起集会、一・六三里塚闘争、一・七全国学生総決起集会、一・八全国労働者総決起集会、一・九三里塚闘争、一・一〇全国学生総決起集会、一・一一全国労働者総決起集会、一・一二三里塚闘争、一・一三全国学生総決起集会、一・一四全国労働者総決起集会、一・一五三里塚闘争、一・一六全国学生総決起集会、一・一七全国労働者総決起集会、一・一八三里塚闘争、一・一九全国学生総決起集会、一・二〇全国労働者総決起集会、一・二一三里塚闘争、一・二二全国学生総決起集会、一・二三全国労働者総決起集会、一・二四三里塚闘争、一・二五全国学生総決起集会、一・二六全国労働者総決起集会、一・二七三里塚闘争、一・二八全国学生総決起集会、一・二九全国労働者総決起集会、一・三〇三里塚闘争、一・三一全国学生総決起集会、二・一全国労働者総決起集会、二・二三里塚闘争、二・三全国学生総決起集会、二・四全国労働者総決起集会、二・五三里塚闘争、二・六全国学生総決起集会、二・七全国労働者総決起集会、二・八三里塚闘争、二・九全国学生総決起集会、二・一〇全国労働者総決起集会、二・一一三里塚闘争、二・一二全国学生総決起集会、二・一三全国労働者総決起集会、二・一四三里塚闘争、二・一五全国学生総決起集会、二・一六全国労働者総決起集会、二・一七三里塚闘争、二・一八全国学生総決起集会、二・一九全国労働者総決起集会、二・二〇三里塚闘争、二・二一全国学生総決起集会、二・二二全国労働者総決起集会、二・二三三里塚闘争、二・二四全国学生総決起集会、二・二五全国労働者総決起集会、二・二六三里塚闘争、二・二七全国学生総決起集会、二・二八全国労働者総決起集会、三・一全国学生総決起集会、三・二全国労働者総決起集会、三・三三里塚闘争、三・四全国学生総決起集会、三・五全国労働者総決起集会、三・六三里塚闘争、三・七全国学生総決起集会、三・八全国労働者総決起集会、三・九三里塚闘争、三・一〇全国学生総決起集会、三・一一全国労働者総決起集会、三・一二三里塚闘争、三・一三全国学生総決起集会、三・一四全国労働者総決起集会、三・一五三里塚闘争、三・一六全国学生総決起集会、三・一七全国労働者総決起集会、三・一八三里塚闘争、三・一九全国学生総決起集会、三・二〇全国労働者総決起集会、三・二一三里塚闘争、三・二二全国学生総決起集会、三・二三全国労働者総決起集会、三・二四三里塚闘争、三・二五全国学生総決起集会、三・二六全国労働者総決起集会、三・二七三里塚闘争、三・二八全国学生総決起集会、三・二九全国労働者総決起集会、三・三〇三里塚闘争、三・三一全国学生総決起集会、四・一全国労働者総決起集会、四・二三里塚闘争、四・三全国学生総決起集会、四・四全国労働者総決起集会、四・五三里塚闘争、四・六全国学生総決起集会、四・七全国労働者総決起集会、四・八三里塚闘争、四・九全国学生総決起集会、四・一〇全国労働者総決起集会、四・一一三里塚闘争、四・一二全国学生総決起集会、四・一三全国労働者総決起集会、四・一四三里塚闘争、四・一五全国学生総決起集会、四・一六全国労働者総決起集会、四・一七三里塚闘争、四・一八全国学生総決起集会、四・一九全国労働者総決起集会、四・二〇三里塚闘争、四・二一全国学生総決起集会、四・二二全国労働者総決起集会、四・二三三里塚闘争、四・二四全国学生総決起集会、四・二五全国労働者総決起集会、四・二六三里塚闘争、四・二七全国学生総決起集会、四・二八全国労働者総決起集会、四・二九三里塚闘争、四・三〇全国学生総決起集会、五・一全国労働者総決起集会、五・二三里塚闘争、五・三全国学生総決起集会、五・四全国労働者総決起集会、五・五三里塚闘争、五・六全国学生総決起集会、五・七全国労働者総決起集会、五・八三里塚闘争、五・九全国学生総決起集会、五・一〇全国労働者総決起集会、五・一一三里塚闘争、五・一二全国学生総決起集会、五・一三全国労働者総決起集会、五・一四三里塚闘争、五・一五全国学生総決起集会、五・一六全国労働者総決起集会、五・一七三里塚闘争、五・一八全国学生総決起集会、五・一九全国労働者総決起集会、五・二〇三里塚闘争、五・二一全国学生総決起集会、五・二二全国労働者総決起集会、五・二三三里塚闘争、五・二四全国学生総決起集会、五・二五全国労働者総決起集会、五・二六三里塚闘争、五・二七全国学生総決起集会、五・二八全国労働者総決起集会、五・二九三里塚闘争、五・三〇全国学生総決起集会、五・三一全国労働者総決起集会、六・一三里塚闘争、六・二全国学生総決起集会、六・三全国労働者総決起集会、六・四三里塚闘争、六・五全国学生総決起集会、六・六全国労働者総決起集会、六・七三里塚闘争、六・八全国学生総決起集会、六・九全国労働者総決起集会、六・一〇三里塚闘争、六・一一全国学生総決起集会、六・一二全国労働者総決起集会、六・一三三里塚闘争、六・一四全国学生総決起集会、六・一五全国労働者総決起集会、六・一六三里塚闘争、六・一七全国学生総決起集会、六・一八全国労働者総決起集会、六・一九三里塚闘争、六・二〇全国学生総決起集会、六・二一全国労働者総決起集会、六・二二三里塚闘争、六・二三全国学生総決起集会、六・二四全国労働者総決起集会、六・二五三里塚闘争、六・二六全国学生総決起集会、六・二七全国労働者総決起集会、六・二八三里塚闘争、六・二九全国学生総決起集会、六・三〇全国労働者総決起集会、七・一三里塚闘争、七・二全国学生総決起集会、七・三全国労働者総決起集会、七・四三里塚闘争、七・五全国学生総決起集会、七・六全国労働者総決起集会、七・七三里塚闘争、七・八全国学生総決起集会、七・九全国労働者総決起集会、七・一〇三里塚闘争、七・一一全国学生総決起集会、七・一二全国労働者総決起集会、七・一三三里塚闘争、七・一四全国学生総決起集会、七・一五全国労働者総決起集会、七・一六三里塚闘争、七・一七全国学生総決起集会、七・一八全国労働者総決起集会、七・一九三里塚闘争、七・二〇全国学生総決起集会、七・二一全国労働者総決起集会、七・二二三里塚闘争、七・二三全国学生総決起集会、七・二四全国労働者総決起集会、七・二五三里塚闘争、七・二六全国学生総決起集会、七・二七全国労働者総決起集会、七・二八三里塚闘争、七・二九全国学生総決起集会、七・三〇全国労働者総決起集会、七・三一三里塚闘争、八・一全国学生総決起集会、八・二全国労働者総決起集会、八・三三里塚闘争、八・四全国学生総決起集会、八・五全国労働者総決起集会、八・六三里塚闘争、八・七全国学生総決起集会、八・八全国労働者総決起集会、八・九三里塚闘争、八・一〇全国学生総決起集会、八・一一全国労働者総決起集会、八・一二三里塚闘争、八・一三全国学生総決起集会、八・一四全国労働者総決起集会、八・一五三里塚闘争、八・一六全国学生総決起集会、八・一七全国労働者総決起集会、八・一八三里塚闘争、八・一九全国学生総決起集会、八・二〇全国労働者総決起集会、八・二一三里塚闘争、八・二二全国学生総決起集会、八・二三全国労働者総決起集会、八・二四三里塚闘争、八・二五全国学生総決起集会、八・二六全国労働者総決起集会、八・二七三里塚闘争、八・二八全国学生総決起集会、八・二九全国労働者総決起集会、八・三〇三里塚闘争、八・三一全国学生総決起集会、九・一全国労働者総決起集会、九・二三里塚闘争、九・三全国学生総決起集会、九・四全国労働者総決起集会、九・五三里塚闘争、九・六全国学生総決起集会、九・七全国労働者総決起集会、九・八三里塚闘争、九・九全国学生総決起集会、九・一〇全国労働者総決起集会、九・一一三里塚闘争、九・一二全国学生総決起集会、九・一三全国労働者総決起集会、九・一四三里塚闘争、九・一五全国学生総決起集会、九・一六全国労働者総決起集会、九・一七三里塚闘争、九・一八全国学生総決起集会、九・一九全国労働者総決起集会、九・二〇三里塚闘争、九・二一全国学生総決起集会、九・二二全国労働者総決起集会、九・二三三里塚闘争、九・二四全国学生総決起集会、九・二五全国労働者総決起集会、九・二六三里塚闘争、九・二七全国学生総決起集会、九・二八全国労働者総決起集会、九・二九三里塚闘争、九・三〇全国学生総決起集会、一〇・一全国労働者総決起集会、一〇・二三里塚闘争、一〇・三全国学生総決起集会、一〇・四全国労働者総決起集会、一〇・五三里塚闘争、一〇・六全国学生総決起集会、一〇・七全国労働者総決起集会、一〇・八三里塚闘争、一〇・九全国学生総決起集会、一〇・一〇全国労働者総決起集会、一〇・一一三里塚闘争、一〇・一二全国学生総決起集会、一〇・一三全国労働者総決起集会、一〇・一四三里塚闘争、一〇・一五全国学生総決起集会、一〇・一六全国労働者総決起集会、一〇・一七三里塚闘争、一〇・一八全国学生総決起集会、一〇・一九全国労働者総決起集会、一〇・二〇三里塚闘争、一〇・二一全国学生総決起集会、一〇・二二全国労働者総決起集会、一〇・二三三里塚闘争、一〇・二四全国学生総決起集会、一〇・二五全国労働者総決起集会、一〇・二六三里塚闘争、一〇・二七全国学生総決起集会、一〇・二八全国労働者総決起集会、一〇・二九三里塚闘争、一〇・三〇全国学生総決起集会、一〇・三一全国労働者総決起集会、一一・一全国学生総決起集会、一一・二全国労働者総決起集会、一一・三三里塚闘争、一一・四全国学生総決起集会、一一・五全国労働者総決起集会、一一・六三里塚闘争、一一・七全国学生総決起集会、一一・八全国労働者総決起集会、一一・九三里塚闘争、一一・一〇全国学生総決起集会、一一・一一全国労働者総決起集会、一一・一二三里塚闘争、一一・一三全国学生総決起集会、一一・一四全国労働者総決起集会、一一・一五三里塚闘争、一一・一六全国学生総決起集会、一一・一七全国労働者総決起集会、一一・一八三里塚闘争、一一・一九全国学生総決起集会、一一・二〇全国労働者総決起集会、一一・二一三里塚闘争、一一・二二全国学生総決起集会、一一・二三全国労働者総決起集会、一一・二四三里塚闘争、一一・二五全国学生総決起集会、一一・二六全国労働者総決起集会、一一・二七三里塚闘争、一一・二八全国学生総決起集会、一一・二九全国労働者総決起集会、一一・三〇三里塚闘争、一一・三一全国学生総決起集会、一二・一全国労働者総決起集会、一二・二三里塚闘争、一二・三全国学生総決起集会、一二・四全国労働者総決起集会、一二・五三里塚闘争、一二・六全国学生総決起集会、一二・七全国労働者総決起集会、一二・八三里塚闘争、一二・九全国学生総決起集会、一二・一〇全国労働者総決起集会、一二・一一三里塚闘争、一二・一二全国学生総決起集会、一二・一三全国労働者総決起集会、一二・一四三里塚闘争、一二・一五全国学生総決起集会、一二・一六全国労働者総決起集会、一二・一七三里塚闘争、一二・一八全国学生総決起集会、一二・一九全国労働者総決起集会、一二・二〇三里塚闘争、一二・二一全国学生総決起集会、一二・二二全国労働者総決起集会、一二・二三三里塚闘争、一二・二四全国学生総決起集会、一二・二五全国労働者総決起集会、一二・二六三里塚闘争、一二・二七全国学生総決起集会、一二・二八全国労働者総決起集会、一二・二九三里塚闘争、一二・三〇全国学生総決起集会、一二・三一全国労働者総決起集会

ついに訪米の陸路を断つ

厳戒を突破、最後まで羽田をゆるがす

かつてない武装総決起をかちとった労学市民は、羽田を拠点に未曽有の厳戒体制を突破、東京都心一帯を武装制圧した。二千余の逮捕に屈せず17日午前10時まで、実に18時間にわたって徹夜で闘いぬいた【記事二ぺん】

（写真は羽田へ進撃する全共闘隊列）

嘉手納基地に大挙突入

17日 県反戦など米兵と武装対決 13日は全島ゼネスト

13日武装海兵隊を撃退

革共同大政治集会

日時　12月8日　午後五時半開場

場所　品川公会堂（国電大井町下車）

基調報告　激動の70年代へ革共同はかく闘う

北小路敏

主催　革命的共産主義者同盟
マルクス主義青年労働者同盟
マルクス主義学生同盟中核派
マルクス主義高校生同盟

後援

日帝をゆるがす沖縄の激動

（一ページへつづく）

糟谷孝幸君（二岡山大年）虐殺さる

故糟谷孝幸君

21日都自代に結集せよ

号外

週刊 前進
発行所 前進社
編集・発行人 由上伸
本社 〒113 東京都文京区東大路2-62-9 電話(03)814-4861(代) 振替 東京88867
関西支社 〒530 大阪市北区堂島南町36 電話(06)371-6816 振替 大阪16016
中国支社 〒730 広島市大手町5-12 電話(0822)41-4578 振替 広島30027
九州支社 〒812 福岡市祖原15-26 電話(092)283-0454 振替 福岡18659
号外 20円 月ぎめ 100円
郵送読者の購読料 1部半年1000円・1年1900円 2部半年1500円・1年2800円 3部以上は送料当方負担

日本列島を席巻した五日間の激闘

蒲田—羽田、十八時間の激闘

二千余名の逮捕に屈せず機動隊を撃破

東京南部一帯を武装制圧

佐藤訪米実力阻止・機動隊殲滅・空港占拠—十一月主決戦は十六日午後四時、国家権力機動隊の「非常体制」を完全に突破し、蒲田警察署を襲撃した手に角材、火炎ビンを握りしめる神奈川県反戦百名の白ヘル突撃隊による炎の嵐と数十㍍までたちのぼる黒煙によって歴史的闘いの幕が切られた。この日、反戦軍団、全国全共闘軍団、反戦高協軍団の白ヘル部隊五千を先頭とする五万の部隊は蒲田駅を中心として品川—蒲田、池上線沿線を軸に国家権力・機動隊の死にものぐるいの警備線に大決戦を挑み、午後四時から翌朝の十時に到るまでの延々十八時間の大激突として闘い抜き東京南部一帯を武装制圧し、羽田を孤立させ、佐藤の羽田に至る陸路を炎と血の海と化して完全に断ち、佐藤は自衛隊のヘリコプターでやっと羽田にたどりつくことしかできなかった。

午後四時五分、国電蒲田駅東口広場を埋める群衆が一斉に拍手と歓声をあげた。駅構内から「ピッピッ」と笛の音があがる。ついに空前の厳戒体制を突破して、地区反戦旗、中核旗を先頭に手に角材火炎ビンを握りしめた正規軍団が蒲田駅に登場したのだ。杉並反戦、葛飾反戦、中野反戦の旗をゆるやかになびかせて広場をデモし、広場中央で徳田陽平東京反戦世話人が激烈なアジテーションを開始する。シュプレヒコールにはまわりの群衆も唱和し、東口広場は戦闘を前に異様な雰囲気に包まれた。

同時刻、国電蒲田駅—羽田間に位置する京浜蒲田駅にも白ヘル軍団七十人近くが登場する。

四時を合図にしたように呼応してその勇姿を国電蒲田、京浜蒲田に登場させた白ヘル全共闘軍団、京浜蒲田反戦軍団は、これよりわずか先に [illegible] って国電蒲田駅直前で非常コックで国電を止め、左側のドアから線路に飛び降りて東海道線をまたぐ環状八号線の陸橋をかけのぼり、三百名の機動隊と八台の輸送用装甲車で守りを固める蒲田署へ、火炎ビンを武器に一気に突撃した。火炎ビンは、身を弾として機動隊とぶつかったしゅんかんに敵の青ヘルメットめがけてふり下された。機動隊は算を乱して逃げる。輸送車三台が火だるまとなった。

神奈川反戦軍団は、大きな戦果をあげ、京浜雑色駅手前を横切って第一京浜へ出た。そのかたに工事現場からステンレスのパイプを入手し、堂々と京浜蒲田へ進撃した。途中感激した一市民が自家用車の使用を申込んだ。京浜蒲田付近で機動隊と激突し、一時は完全に包囲されたが、国電蒲田に軍団が続々結集している報を聞いて、機動隊を正面突破して東口の部隊と合流をかちとった。

これら蒲田一帯の闘いを十八時間の激闘の第一ラウンドとすれば第二ラウンドは、六時すぎから池上線蓮沼駅—雪ヶ谷大塚駅までの間で闘われた。

この四時前後をして闘い抜かれた英雄的・決死的闘いにひきつづき、羽田へむけての人民の大進軍は休む間もなくつづいた。

品川駅に結集した五百名は品川署を完全に包囲し、七㍍近くまで破壊し、バス一台を奪取しそれを運転して阻止線に使われた装甲車に衝突させ、それを炎上させた。また品川駅から蒲田へ向った中核軍団五百も平和島付近で交番を破壊し、機動隊の攻撃をはね返しつつバスでバリケードを築き、一歩一歩蒲田—羽田への進軍をかちとり、蒲田駅東口の大部隊との合流をなしとげたのである。品川—蒲田間は中核、全共闘など数千の一大戦線が築かれ、各所で羽田へ向け進攻が繰りひろげられた。

一方、五反田駅から蒲田駅を結ぶ池上線沿線の蓮沼駅（蒲田駅から一つめ）を中心に雪ヶ谷大塚駅までのびる戦線の[illegible]烈をきわめ、午後六時から九時すぎまでえんえんと続けられた。この闘いは中核派の三つの軍団、二千の全共闘、反戦（静岡・長崎など地方）、産別反戦を中軸に担われ、第二京浜では多摩川大橋から新幹線ガードまでの二㌔にバスなども使って六ヵ所のバリケードを構築して闘った。そのうち中核派の三百名は五時五十分に再度蒲田署襲撃をかちとった。

八時半すぎ、品川方向、五反田方向から機動隊の阻止線を突破し、国電蒲田に合流した白ヘル軍団は、二千の群衆をひきつれ、全学連書記次長藤木君を先頭に東口を再制圧し、火炎ビン角材で武装して機動隊と大激戦を展開。東口は再び、ガス弾の白煙と火炎ビンの炎でうずまいた。その中で東口広場中央のポールにへんぽんとひるがえった中野反戦の旗は、闘う者すべてに力強い勇気を与えた。

また、蒲田—目黒間を結ぶ目蒲線沿線の下丸子では反戦高協軍団五百の若き戦士も姿をあらわし、蒲田へ進撃し、途中機動隊と幾度となく激突を続けた。

戦闘は十二時近くになっても各所で激烈に続けられ、終電車の後も残った部隊は、激しい雨の中、各所で翌日の闘いにそなえて武器を調達し、闘い抜いた。

午後四時五分。火炎ビンを手に蒲田駅東口前広場に現れた白ヘル反戦軍団

反戦二万五千が決起

15日 沖縄県反戦と固い連帯

十五日夜東京日比谷野外音楽堂で「全国反戦労働者総決起集会」が二万五千人の青年労働者、学生高校生を結集して開かれ、訪米阻止・空港占拠を圧倒的な雰囲気の中で確認し、死を賭した闘いを固く決意する最後の集会となった。

集会は、三重、宮城の両県反戦を議長に、虐殺された岡山大糟谷孝幸君に対する復讐を誓う黙とうによって始まった。沖縄県反戦の佐久本洵事務局長をはじめ、東京反戦の徳田陽平世話人など各世話人、自治労、東水労、動労の各青年部、長野、全大阪、広島、長崎の各府県反戦の労働者が闘いの決意を表明した。また、全国全共闘山本義隆議長の獄中からのメッセージ、三里塚芝山連合反対同盟老人決死隊の岩沢吉井氏、統一救援センター、べ平連、全国部落研連からの連帯のあいさつがよせられた。

十三日の那覇軍港デモを闘いぬいて遠路東京に駆けつけた沖縄県反戦の佐久本氏の演説は、十一月決戦のもう一方の主戦場からの連帯として万雷の拍手を浴びた。十月五日ついにはじめての革命的労働者の集団県反戦の結成をかちとったことを報告し、沖縄全県民をひきいて米軍との実力対決、米軍基地解体を闘いぬく決意が表明された。

東京地区反戦世話人・三多摩反戦事務局長徳田陽平氏は「いまこそ重大な決意を固め明日夕方蒲田に結集し、羽田空港を占拠しよう」と熱烈に訴え、満場はかつてない興奮のるつぼと化した。

沖縄など各地で火ぶた

13日 総評63単産もスト

〝激闘の五日間〟の火ぶたを切る闘いが十三日、本土、沖縄で同時に開始された。

この日、沖縄では「全軍労ゼネスト」、那覇軍港包囲・軍道路完全制圧の闘いが十万県民決起でかちとられ、沖縄中核派学生、県反戦、沖闘委を先頭に万余の民衆は火炎ビン、石を武器に軍と直接対決する那覇軍港突入闘争が闘い抜かれた（一めん参照）。本土ではこの沖縄の闘いに呼応して、総評系労働組合が佐藤訪米に抗議して統一ストをおこなった。このストに参加した組合は、公務員関係八単産、公共企業体の単産、民間の二十九単産でこのほか国家公務員関係の十三単産と民間四単産が勤務外職場集会をおこなった。このほか東京、大阪、仙台などで機動隊との激突が展開された。

東京では、四百名の反帝学評、フロント、プロ学同が銀座四丁目や地下鉄構内で火炎ビン、投石で機動隊と激突し、一帯は火の海となった。また地下鉄泉岳寺駅でも構内で機動隊と衝突、電車に火炎ビンが投げられた。また日比谷野外音楽堂では東京地評が一万三千人を集め集会・デモ、清水谷公園ではべ平連が二千二百名を結集し集会、デモをおこなった。

このほか大阪、神戸、京都、広島、岡山、高知、松山、福岡、札幌、名古屋、仙台など全国各地で集会とデモが展開された。とくに大阪では、扇町公園で大阪地評の集会のほか、反戦、全共闘・べ平連の統一集会も扇町公園でひらかれ、デモでは火炎ビン、鉄パイプで機動隊と激しく闘った。機動隊の規制は残虐をきわめ、警棒を打ち振って学生をメッタ打ちにした。この警棒のメッタ打ちを頭にうけて岡山大生の糟谷孝幸君が虐殺された。（記事一めん）

写真上は池上駅付近で丸太を抱えて機動隊と激突する全共闘軍団。下は火炎ビンを投げて京浜蒲田駅で闘いの突破口をひらいた全共闘軍団

全国部落研連が浦和地裁を占拠

狭山差別裁判を糾弾

十一月十四日、全国部落研連の旗のもと、英雄的な部落解放戦士の部落青年たちは、わが兄弟石川君を狭山事件の「被告」にでっちあげ、部落民だという理由で死刑の判決を下した浦和地裁を実力で糾弾し、ここにはっきりと全国水平社の革命的暴力主義の復活を宣言した。

十一月決戦の真只中の十四日、全国部落研連合の部落青年五人の白ヘル決死隊は、暁の静寂をうち破って浦和地裁を襲撃した。一階二階にバリケードを構築すると共に三人の青年は、地裁の屋根にのぼり「部落解放」の旗を大きく打ちふり、「狭山差別裁判実力糾弾！」「全国の部落青年総決起せよ！」と大書されたたれ幕を屋根の上からたらした。そのかん浦和地裁職員は、ただぼうぜんと見ているだけであり、付近の住民は地裁の屋根の上から堂々と「差別撤廃！」「日本帝国主義を打倒し部落を解放せよ」と叫ぶ三青年の演説をじっと聞き入っていた。

突入後約一時間半後、機動隊はやっとおそるおそる排除にかかったが、決死隊五名は七本の火炎ビンと地裁屋根のかわらをひきはがして機動隊に激しく投げて徹底抗戦を闘い抜き、地裁はじつに約二時間にわたってこの英雄的解放戦士によって完全に占拠された。

白ヘル軍団、17日も進撃

十七日の佐藤の羽田離陸時まで続けられた白ヘル軍団を先頭とする不屈の訪米阻止闘争に機動隊は十七日に入っても殆ど気をゆるめることができなかった。十六日に引き続いて、首都に二万五千人、首相官邸に五百人、羽田空港に三千三百人、海上に保安庁巡視艇四十四隻を繰り出し、ロックアウト体制を保持した。この厳戒体制と前夜の二千人近くの逮捕者にもひるまず二千人以上が羽田一帯に野宿しながら、真夜中から十七日の闘争は開始された。

まず午前二時四十六分、荏原署二葉町交番を約三十人の部隊が襲撃し、次々に火炎ビンを放り込み交番を全焼させた。そして各地域で執ようなゲリラをおこなった後、朝になって労働者、市民が蒲田一帯に再び繰りはじめたのを合図に白ヘル反戦軍団、中核派軍団は再び羽田への不撓不屈の進撃を同時に三方向から開始した。

まず七時十分頃、多摩川河川敷内の大田区民広場に総評、社会党の中止命令をはねのけて二千五百人の労働者、学生が結集した。大田区反戦、神奈川反戦の白ヘル軍団を先頭に反戦派労働者。中核派を領導部隊とするML、第四インターを含む全国全共闘軍団。その他大学べ平連や民学同も集結した。訪米阻止現地闘争委（委員長部職労の大田支部長川西平光氏）の司会で簡単に意志統一した後、自治労白ヘル反戦八十を先頭にあの〝恨みの弁天橋〟へ向けて最後の突撃を開始した。

七時四十五分、地下道で機会をうかがっていた中核派部隊が手に手に石をもって前夜の主戦場国電蒲田駅前に登場し、機動隊の隊列をめがけて猛然と突進し、格闘の末、全員が逮捕されるまで角材を武器に闘った。その頃、付近で一夜を明かした反戦高協軍団は武装して国電蒲田駅に向かったが、途中機動隊と激突し、英雄的な闘いの後多数が逮捕された。そして八時ごろには駅前から中核全学連の十五人が角材で武装し、駅前の機動隊に突撃した。そして最後の一人が逮捕されるまで闘った。

佐藤はこの激闘を恐れて「雨天の場合は高速道路で行く」という予定をひるがえして雨中ヘリコプターで負け犬が追われて逃げるように空港に飛んでいった。機動隊しかいない空港で佐藤は醜い作り笑いをし、恐怖で顔面をひきつらせながら機中にそそくさと入っていった。一億人民に侮辱されて。

三里塚反対同盟

戸村委員長ら13名逮捕

ブルドーザー占拠の闘い

十二日、三里塚から十一月決戦ははじまった。早朝、資材運搬道路建設用ブルドーザーが駒井野に導入されたのを知らせるドラムカンが打ち鳴らされた。反対同盟三百はブルドーザーを包囲して坐り込んだ。

戸村一作委員長はブルドーザーの上にさっそうと立ち演説。一時間半もたってからあたふたとかけつけた百数十の機動隊が到着。肉弾戦の末、戸村委員長、杉森信一反戦現闘本部長ら十三名を引きずるようにして連れさった。

しかし、農民は「どうせなら皆持って行ってくれや」と全員坐り込んで闘った。この日の逮捕は「威力業務妨害」の名の下に、幹部、青行隊、常駐支援部隊を狙った予防反革命であった。

十四日の早朝には遂にゲリラ戦の第一弾として「ブルドーザー焼き打ち事件」も勃発している。三里塚闘争は不敗だ。

（一めんからつづく）

を死守するため、共同の侵略強化をうたう日米共同声明は、早くも日本はもちろん、アメリカ、アジア人民からの厳しい反撃にさらされているのだ。

特に沖縄では、十三日の全県ゼネストを出発点に、本格的な闘いが始まっている。日本帝国主義の威信高揚と支配強化、七〇年乗り切りという佐藤の思惑とは正反対に佐藤のいう「沖縄返還」は、沖縄百万県民の強烈な拒絶をうけた。巨大な基地、核つき、B52、毒ガスつきに加えて、安保条約大改定アジア侵略への自由発進を約束する佐藤の「琉球処分」は、明治政府や吉田茂のそれ以上に、憎悪をもって迎えられている。わが同盟の「沖縄奪還」に小児病的反発を続け、佐藤の手による「返還」で日帝支配が貫徹してしまうと信じていた諸君の混迷をよそに、沖縄の労働者、農民、学生、高校生の闘いは見事なカーブを切って「安保粉砕」へ大きく左傾してきた。

八月十四日嘉手納基地突入の三学生に続いて、十一月九日泊港に火薬武装上陸を貫徹した二十六学生など、わが中核派の沖縄現地闘争は、この巨大な左旋回の推進力となっているのである。十三日那覇軍港をゆるがす闘いは復帰協傘下の労働者、農民、学生の強い支持をよび、復帰協指導部の動揺をこえて十七日の嘉手納闘争により大きな爆発をつくりだしつつあるのだ。

沖縄の闘いが、日米共同声明で〝終る〟と考えるのは最も馬鹿げたものである。逆に、七二年をメドに、「反戦復帰」＝基地撤去、米核、B52、毒ガス撤去の闘い、米軍支配に対する闘いが実力闘争としてますます拡大するだろう。「本土なみは機動隊だけ」という状況は、百万県民をあげて本土政府との正面対決に進ませるだろう。沖縄県反戦を先頭に、わが同盟は激動の七〇年代の第一の中心点沖縄の闘いの先頭に立つものである。

佐藤は、このことをすでに予期し、日米共同声明を極力あいまいな表現にする一方、帰国早々国会を解散し、すべてを伏せたまま総選挙を乗り切ろうとしている。「沖縄返還」で七〇年を乗り切れないとすれば、残された道は権力による大弾圧、それを合法化するための選挙による支配権の強化しかない。野党がまったく闘う意志を持たず、大衆に訴え、大衆を組織するのは革命的左翼のみという状況を唯一の救い神として、解散総選挙に一層の警察国家化を狙っているのだ。だがそれは、既成左翼への打撃にはなってもわれわれには全く無力な切抜け策である。

だが、深まりゆくアジア危機の中で、日本帝国主義の未来は、こんな小細工で乗り切れるほど甘いものではない。七二年まで戦争が続くベトナムに加えて朝鮮半島の情勢は耐え切れぬ緊張を加えることは間違いない。そもそも日米共同声明の真の目的は、このアジア危機に対し、日米帝国主義共同の戦線強化をうたうものである。したがって佐藤は、七二年をめざして、沖縄基地の強化はもちろん、本土の米軍基地と自衛隊の強化を進め、朝鮮半島への共同出撃に備えての死物狂いの侵略体制確立に突入するのである。われわれは、沖縄を先頭に、日本全土において安保の個別実体に対する実力粉砕の闘いを全面的に展開し、七〇年六月から七二年へと、日帝に対する総力戦に突き進まねばならないのである。それは、十・二一から一カ月の激闘で体験した、機動隊支配を実力で突破する武装人民の闘いを全面的、日常的なものとするであろう。

安保粉砕・日帝打倒の旗高く

〝激動の七〇年代〟に対するわれわれの確信は、一カ月の激闘をとおして不動のものとなった。われわれは、十・二一、十一・十六—一七の闘いを一人一人のものとし、それを実現した力を一層拡大すれば、確実に勝利できるのである。これは体験に基く最も具体的で確実なものだ。敵はすでに警察力を出しつくした。われわれは、これに二度対決し、二度うち破ったのだ。後は自衛隊の出動のみである。

われわれは、たしかに十六日羽田に突入することは出来なかった。しかし、一カ月足らずのうちに二度、全組織をあげて闘い、合計三千五百余の逮捕者を出しながら、自信に満ちて進んでいる。しかも権力は、現場検挙者の処理に手一杯で、すでに昨年十・二一騒乱罪、四・二八沖縄闘争の追及を打ち切り、なおわれわれの組織を破ることは出来ないのである。七〇年の激動を前に、何度目かの「中核派壊滅」宣伝が秦野章の自慰にもならぬことはいうまでもあるまい。

われわれは、しかし七〇年に向って、さらに前進しなければならない。この一カ月の闘いが教えてくれたものは、われわれの闘いが本物の革命をめざす闘い、街頭における闘争を一つの頂点とし、その基部で展開される革命組織と警察機構との全面的組織闘争であるということだった。永い平和的時代は終り、階級闘争はその本来の姿を回復したのであり、われわれの革命的闘いは、より本格的な反革命を育てたのだ。これに耐えられる者が崩壊し四散する中で、われわれは自らを真の革命党へ強化する絶好の機会をつかんだのである。十・二一から十一・一七に至る闘いを支えたものは、わが同盟の党組織であり、それが十分貫徹しえなかった部分も、われわれの党組織の限界であった。われわれは、一カ月の闘いの貴重な体験を共に闘った仲間に、この闘いで目を開いた仲間に返し、巨大な労働者、学生、高校生、市民を「党」へ、わが同盟へ、マル青同、マル学同、反戦高協へ獲得しなければならない。

組織——あらゆる意味で組織こそ、かれらの闘いを担うものである。強力な武装軍団と、それを支える広汎な非公然部隊、死を恐れず機動隊を粉砕する決死隊と、あらゆる場所、職場に配備され、情報を集め、物資を製造調達し、活動家を守る任務を果す平服の戦士の一体となった闘いなしに、われわれはこの警察国家に抗して闘うことはできない。しかしわれわれは、十分それをやりとげうる自信を多くの不十分さを残しながら二度までもつかんだのである。われわれは、党と革命に対するイメージを、この体験にふまえてより豊富に、より現実的にしなければならない。赤軍派の悲劇とわれわれの体験は良き指針であろう。

学生・高校生の圧倒的な軍団化が、われわれの急務であることは言うまでもない。大学を再び機動隊の手から奪還し、学生運動を日本階級闘争の最先頭に立てつづけるため、わが中核派は再び大躍進を開始せねばならない。この一カ月間二度の闘いをつつむ全国的なバリケード闘争を進めた高校生は新しい日本階級闘争の戦力として全学連がもつ地位を自らの手でかちとることは目前に迫っている。

この一カ月の激闘を実体的にも主力となって担ったのは反戦派労働者であった。六七年十・八から二年間をさらに飛躍させた担い手は、わが反戦派労働者であった。十・二一で起訴された百八名の反戦派労働者、今度の闘いでさらに起訴されるであろう多数の労働者は、これから反戦派労働運動の中心指導者として、日本労働運動の前人未踏の炎の道を踏み進む重荷を負っている。だがここに、日本労働者階級人民の、すべての未来が荷われているのだ。権力は、これまで躍起につくしていた反戦派の実態を逮捕者によって知り、恐怖の色を深めている。権力の科学の中枢東大宇宙研究所で火炎びんが製造され、郵便車を使ってそれが運ばれ、父兄の信頼の厚い女教師がそれを貯え、八幡や東芝の技術者が、自ら製造した火炎びんを持って突撃している事実を前に支配階級は一体だれを信頼すれば良いというのか。支配階級の中枢に革命の力が着実に浸透していることの、これはほんの一端にすぎない。「一握りの学生のはね上り」がこの有様なのだ。

もちろん、革命の前進は密集した反革命を生むことは、労働者人民の内部においても同様である。市民の自警団に示される反革命の組織化は、わずかの私有財産にしがみつく人民の弱さを逆用してそれなりに進むし、企業防衛の側に立つ労働者の一層の反動化も少なくない。一切の甘い幻想を捨て革命は泥まみれ血まみれの闘いであることを反戦派労働者は身をもって知りつつ進むのだ。

二十二日の日米共同声明、二十六日佐藤帰国、二十九日臨時国会という進展の中で、沖縄を先頭に新しい怒りがふき上ってくることは必至である。総選挙の狂乱がこれを一度は押し止め、新しい反動を用意することも間違いあるまい。だが、この年末、年始の既成支配機構内の波紋ではとうてい処理できない、本格的な帝国主義の危機が、人民と支配階級の分裂が進行することをわれわれは見抜かねばならない。われわれは、ここに七〇年代の激動の基盤をより強く築かねばならない。権力は、「新左翼壊滅」を叫び、「当分ゲバ路線はとれまい」と宣伝につとめている。だが、それが何の役に立つかは、すでに二年間の実績が示している。

われわれは、権力の死力をつくした組織破壊攻撃—事後弾圧を断固としてはね返しつつ、十・二一の四百二十二名、今回の二千名をはじめ、秋山勝行同志らすでに一年以上にわたる長期勾留中の同志の奪回闘争を組織する。二度にわたる今回の大量検挙は、東大裁判に続いて東京地裁の裁判所としての機能をマヒさせるのに十分すぎるものである。

われわれは、ただちに組織を整え、日米共同声明の実施への反撃を用意しなければならない。安保個別実体—米軍基地や自衛隊に対する実力闘争が、その最も良い反撃となろう。日本革命的左翼と権力の引き続き生き残る最大の対決点であり、農民を軸に広汎な人民が政府と対決する戦場である三里塚空港建設阻止闘争と、沖縄における基地への実力攻撃を両軸としつつ、七〇年六月の大決戦をつくりあげていくのが、われわれの次の目標である。

同志・支持者諸君！全国の労働者・学生・高校生・市民諸君！われわれは、闘いの鉄火の中で鍛えられた。安保粉砕・日帝打倒の旗をさらに高くかかげ、共に前進せよ！